
三人寄った

sunnysing

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人寄った

【Nコード】

N2902J

【作者名】

sunnysing

【あらすじ】

会いたい。たったそれだけ、でもとても強い想いが、何の接点も無かった三人を引き合わせた。三人寄れば文殊の知恵なんて言うけれど、彼らの場合は一泊分の宿賃がぎりぎり集まるだけだったり。気の強い赤毛の孝行娘、自称 “未来の勇者”、そして小さくとも底知れない力を宿した魔法使いが今、旅を始める。

三人、旅立った

「ごめんね、母さん。もう、待てないの」

だから、自分から会いに行く。

そう決めた少女の頬を撫でるように、夜明け前の暖かな風が吹き抜けた。

隙間だらけのボロボロの小さな家。けれど年がら年中暖かいこの町では、そんなことは苦ではなかった。

家に訪れる風だって、ほら、こんなにも暖かい。

それはまるで、少女を引き留めようとするかのようで、少女は思わずクスリと笑った。

「ごめんね」

今度の謝罪は、長年自分を守ってくれた、この家と、優しい風に。「スージー・ベルン、行って来ます!」

*

*

*

「おっし、今日だああああっ!」

理由は、特にない。ただ、目が覚めたときまだ陽が昇りきってなくて、きれいだなあ、なんて思っていたら、身体がムズムズしてきただけのことだ。

少年はがばつと身を起こすと、大きく吼えた。

「今日、俺はここを発あーっ!」

*

*

*

「今日で僕も14ですかー」

古びた廃屋からのそのそと這い出すのは、何か黒い物体――では

なく、服という服を全て黒で統一した、小柄な少年だった。どうやらサイズが合っていないらしく、着るというよりは、着られている、と言った方が正しそうだ。

ぶかぶかの三角とんがり帽子のふちを少しだけ持ち上げ、彼は空を眺めた。

「朝焼けですかー。旅立ちにはピッタリですねー」

三人、旅立った（後書き）

はじめまして、sunny singing です！

この度はいらしてくださり、本当にありがとうございます。

どうか最後まで彼らの旅を見守って下さったらとっても嬉しいですよ！

よろしくお願いしまーす♪

三人、出会った？

町はまだ、起きていない。

もう何時間かすれば、穏やかながら活気に満ち満ちた空気に包まれ、人々の笑顔が行きかうこの町が、今はまるで別人のように見える。そんな町を起こさないように、心なしかスージーは足音を潜めていた。

やっと町を出て、旅の道へと入っていく。隣町エスニアまでは、ひたすら歩いて約五日。段々と、足取りが軽くなっていった。足音が軽快になり、しまいには鼻歌まで歌いだす。

母がよく聴かせてくれた、あの歌を。

「おほしさま　どうかお願い　この子を……」

「——おくれえは勇者ア〜っ！　ゆ〜うしやア〜、さまあア〜っ

！……」

ものすごいドラ声が轟き、スージーは思わず飛び上がった。このメロディー、どこかで聞いたことがあるような。たぶん某ガキ大将の歌の替え歌バージョンのような。いや、そんなことはこの際どうでもいい。問題は、スージーの明るいく手を遮った人物が、どの面下げて現れるかだ。

スージーはいかにも気に入らないという顔で、キツとその根源を睨みつけた。

「ちょっと！あんた何なの？！人が気持ちよく歌つてるところに突然そんな変な歌入れて雰囲気ぶち壊しにして！今良いところだっ

たのよ?!これから私が母さんとの過去を、思い出の歌をバックに回想する超絶悶絶果てにはアーギュさんの牛も引っくり返って気絶するような最上級の……」

「おいおいおいっ!なんだよ俺様が歴史的に謳歌されるだろう歌を先取りしてさりげなく庶民に公表してるところによおっ!こちとら未来の勇者なんだよ、ゆ・う・しゃ!分かる? Do you understand?」

「分かんないわよ!っか無駄に発音良いとこがム力つくわねこの三下役者!」

「な、なにをこの小娘!あん時悪の大魔王コンチキチキから守ってやるんじゃないかっただぜ!」

「誰よそれ変な名前ね。守られた覚えなんてないから!てかあんたと私そんな歳変わんないから!」

初対面でありながら思い切りスージーと罵倒し合っている少年は、どうやら自分と同じく旅人の類らしい。とはいえスージーよりはずっと旅慣れしているようで。履いているショートブーツも服も、擦り切れてはいるが動きやすそうだ。腰に無駄に長い剣をさしている。柄が妙に安っぽい。あまり清潔そうではないぼさぼさの髪に、日焼けした浅黒い肌。人懐っこそうな、言うならばきらきらと光が瞬きそうな生き生きした目が、彼の印象に活気を与える。

とはいえ今のスージーにとって彼は、道端のぺんぺん草程度でしかなかった。

喧騒にしばしの一服を持つと、スージーは改めて少年を睨んだ。

「邪魔しないでよね!私は一人でエスニアの町までテクテク歩いてくんだから!じゃあね、“勇者さん”」

そついうと、くるりと踵を向けて歩き出す。後ろから何か不穏な気配がするが、気にしないことにして歩き続ける。嫌な予感がした

スージーは、足を速めた。

てく。てく。てく。てく。

てく。てく。てく。てく。

$$\tau \prec \tau \prec \tau \prec \tau \prec \tau \prec \tau \prec \tau \prec \tau \prec \tau \prec \dots$$

「——ちよつと何で着いて来るワケ?! ストーカー?!」

「勇者ガロン様だあつ！だがお前は俺を勇者として認めていない。」

「よって俺は、お前が俺を勇者だと認めるまで永遠に憑いてやるぜ！」

「何その数字みたいな台詞。つか本当、勇者とかどうつてもいいか

ら。ついてこないでよね、
“勇者さん”」

しっしつと野犬のように手をふられ、ガロンは一瞬怯む。だがすぐに立ち直り、再び突撃しようとしたその時だった。

「まーまー、落ち着いてくださいよ、スーギーさん、勇者ガロンさん」

不意に後方からのんびりとした声がし、二人は驚いて振り返った。そこには、全身を黒い長いローブで包んだ（包まれた、の方が正しい）小さな金髪の少年が佇んでいた。ガロンやスージーよりも年下のようなが、幼い顔つきに知的なナニカが潜んでいる。

スーギーとガロンは無言で目を合わせ、そして、揃って少年に問いかけた。

「…あんだ、誰？」

三人、出会った？（後書き）

うーん、コメディって難しいですね・・・。

三人、出会った？

一瞬、気温が氷点下まで下がったのは気のせいだろう。スージーとガロンの間に突如割って入ってきた金髪の少年は、その笑みをニッコオリと深めて言った。

「えーっと、僕ですか？僕はですね、エリックと言いますー。まあ、ついさっき旅を始めたばかりの新米なんですけどー。というわけで、よろしく願いますー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガロンとスージーは押し黙った。スージーは少し顔を俯けて、なぜかプルプルと震えている。ガロンは、脳内で思考を全起動させてめまぐるしく考えていた。

・・・こいつ、何も言わないうちから俺達の名前を言いやがった。

9

もしかしたら、もしかしなくても警戒した方が良くのかもしれない。もしかしなくても、こいつは未来の勇者ガロン様の餌食となるべく現れた悪の手先かもしれない。もしかしなくてもこの小生意気な町娘Aに感謝され、あまつさえ勇者だと認めてもらえるチャンスかも――

「きゃ~~~~ッ!! すっごい可愛い!!!!」

突然、スージーがエリックに抱きついた。予想外の出来事に、エリックはたたらを踏むが耐え切れず、思い切り地面に押し倒される。ガロンは啞然とした。こいつ、警戒心というものがないのか?!

「やだあゝ、あなたどっから来たの？もう超可愛いんだけど！何？旅始めたばかりなんでしょ？良いわよ良いわよ、お姉さんがどこでも一緒に行つてあげちゃう！え、名前？スージーよ、スージー！」

「え、あの、スージーさん・・・」

「やだ、呼び捨てで良いわよエリック！え、何？来る？何が？」

「あの・・・モ・・・が・・・」

ガロンは目を細め、遠くを見やった。一見少女に潰されかけた少年の呻き声としか取れないが、長いこと旅を続け、経験だけは重ねたガロンには分かった。確かに、感じる。全身に寒気がする。

剣を抜き、構える。剣先が陽の光に反射する。

・・・来る。

やっとスージーに解放されたエリックが、大声で切羽詰つたように叫んだ。

「ですから、もうすぐモンスターが来るので逃げないとあぶな——」

ドゴオオオツ！

「キヤーーツ！！」

あぶない、と言おうとしたのだろう。だが遅かった。

ガロンが構えていた数メートル先の地面が突如割れ、モンスターが飛び出した。ガロンと同じ位の大きさを、モグラのような体毛にギラギラと光る赤い瞳。極めつけは、50センチはゆうにある鋭い爪。爪しか取り得のない超絶弱小モンスター、モグロンだ。

「チツ。悪の手先の手先の手先つてところか。未来の勇者として、

気づけなかったのが情けないぜえっ！」

叫びつつ、ガロンは剣片手にモグロンに飛びかかる。モグロンは長い爪でガードした。舌打ちしつつガロンは下がり、体勢を立て直す。

・・・前言撤回。気づかなかったんじゃないくて、あえて気づいたふりをしてなかったただけだ。未来の勇者として、謙遜してみたただけだ。

今度こそは命中させようと、両手で剣を引っ掴み、ガロンは飛び掛かる。しかし剣を振り下ろした次の瞬間、モグロンは地中にもぐり、姿を消した。

「くそっ」

別に油断してたわけじゃない。断じて。ちょっとモグロンにハンデを与えてやったただけだ。断じて、ガロンの動きがトロイとか、そういう問題じゃない。

一部始終をぼうつと見ていたスージーは、やっと我に返り、興奮したように叫んだ。

「え、い、い、今何？あれ、何？モンスター？噂の隣のティッピーさんとこのモンスター？！」

「どんな噂だよ！」

「あれはですねー、モグロンといいまして、長い爪と地中を高速で移動できることでよく知られる——」

ガロン突っ込み。エリックが取り成すようにスージーに説明し、スージーがふんふんと頷く。

だが今は、二人の能天気な会話に入っていく余裕がない。いくら相手がザコモンスターとはいえ、悪の手先の手先のそのまた手先とはいえ、未来の勇者が手抜きをするわけにはいかないのだ。

実際は、モグロンというモンスターが、生き物の熱源を地中から察知して、獲物の間近に突如現れ襲い掛かるというやり口を知っていたからなのだが。

「おい、おまえら。ちょっと静かになあ・・・」

ドゴオオオッ！

「キヤーツ！」

「わわっ、わー！」

噂をすれば、モグロンは、スージーとエリックが会話をしていた丁度真ん中に現れた。

二人は我を忘れてただ叫ぶ。ガロンはひた走った。間に合うか？未来の勇者ガロン！

ザクツと、剣が何かを切り裂く音がした。

三人、出会った？

「とりあえず、皆さん無事で何よりですー」

エリックが笑みを浮かべて言った。背景には、剣ですっぱりと切られたモグロンのシユールな屍。

愛らしい笑顔を、スージーがぎゅっと抱きしめる。

「本当、エリックのお陰ね」

「いやちよい待てええっ！どう考えても俺だろおっ！俺が倒したんだろおっ！！」

「何言ってるの。エリックが教えてくれなければ、今頃私達二人ともあの爪の餌食だったわよ。助かったわ、エリック。ありがと」

「オイーッ！未来の勇者様へのお礼は？！」

ガロンの空しい叫びが木霊する中、スージーはエリックの頬に軽くキスをした。エリックは心なしか頬を染める。

ガロンは、ぷるぷると身体が変な風に震えるのを必死で抑えた。堪える勇者。打ち勝て勇者。勇者は謙虚であってこそ、きつと格好良いんだ。この町娘Aもきつと、ガロンの忍耐力、いや、謙虚さを試しているんだ。きつとそうだ。

それにガロンは、一つ気になっていたことがあった。

「にしてもどうしてお前、俺より早く、モンスターが来るなんて分かったんだ？」

ガロンはこれでも一応、場数だけは踏んできている。勝敗は別と

して、経験だけは無駄に積んできている。訂正。無駄ではない。どんな経験も次に生かしている・・・はずだ。

スージーはエリックを抱きしめていた腕を緩めると、エリックの顔を覗き込んだ。

実はスージーも、気になっていた。

「まあ、あの三下役者より早いのは当たり前として。私も教えてほしいわ。もし一人のときに襲われたりなんてしたら困るもの」

「勇者だあっ！役者じゃねえっ！とにかくエリック、教えるおっ！」

二対の瞳に見つめられ、エリックはたじろいだ。おどおどと交互に二人を見返す。

「えーつとですね、それは・・・」

「お前、魔法使いか？」

「・・・・・・はい」

エリックは恥ずかしそうに頷いた。ガロンは頭を掻く。

「いや、何も恥ずかしがることないじゃねえか。かくいう俺なんか未来の勇者サマサマだぜ？」

ガロンはもつと謙虚になるべきだ、とスージーは思った。

エリックは本当に恥ずかしそうに、だが少し頬を緩ませながら言っただ。

「お二人とも、僕が魔法使いでも怖がったりなさらないんですねー。良かったですー。まあ、魔法使いって言っても、本当にちょっとた

しなむ程度くらいしか出来ないんですけどー」

二人の顔が、少しだけ曇った。

魔法使いという分野の者達を、忌み嫌う人がいる、ということは、確かに嘘ではなかったからだ。そしてそんな人たちを、一度ならず見たことがあった。だが。

「こーんな可愛い魔法使いなら、何人だって大歓迎よーっ！」

再びスージー、エリックをハグ。エリックはもごもごと弱い力で暴れつつも、結局は彼女の好きなようにさせることにした。

そしてガロンは——ほんの少し、目を細めた。

三人、出会った？

「それにしてもエリック、どうしてそんな大きな服着てるの？」

「えーっとですね、服がこれしかなかったものでしてー」

「どんな状況だったの・・・？」

スージーは首を傾げる。エリックはハハハ、と笑った。

段々と昇ってきている陽が、仲良く並んで歩く二人の影を伸ばす。それはどこからどう見ても、完結した二人の世界。

「ところでさ、どうしてあんたはさっきからずーっと憑いて来るワケ？」

「なんだその悪霊扱いはあつ？！勇者だ勇者！」

「はあ？あんたさっき自分で『憑いていくゾー』なんて言ってたじゃない」

ガロンは負けじと言い返す。さっきから阻害されつつある彼は、少々肩身の狭い思いに浸っていた。

「エスニアまでの道は一本しかないだろうがあつ！未来の勇者たるガロン様が、そこを通らずしてどこを行くってんだあつ！！」

「うーん、道無き道？」

ガロンは思わずガツクリした。

一瞬それもありかも、なんて思ったけど。かなり格好良いかも、なんて思ったけど。

「ふざけんなあーっ！！」

「奇遇ですねー。僕もエスニアに行くんですよー」

二人の激しいやり取りになかなか口を挟めなかったエリックが、絶妙なタイミングで口を開いた。

ガロンがまるで、救世主でも見るかのようにエリックを見る。微妙に目が潤んでいる。

「スージーさんですかー？」

「そうよ。取りあえずはね」

スージーは、少し真面目な顔つきで頷いた。

エリックは、にっこりと笑った。

「じゃあ、三人一緒に行きましょうよー。一人で旅って結構大変ですし、せつかく三人とも同じところに行くんですから。三人それぞれ出来ることを、分担するなんてどうですかー？ガロンさんはモンスター退治、スージーさんはお料理、僕は、そうですねー・・・」

「アイドル担当よっ！！」

スージー、エリックをハグ。エリックは頬を赤らめる。

ガロンも渋々ながら頷いた。

「しかたねえな。俺は勇者だから、アイドルの座ならお前に譲ってやってもいいぜ。大切にしろよ」

ナニサマだ。

とにかくそんなこんなで三人は、エスニアまで共に行くことになったのだった。

三人、出会った？

虫の鳴き声がする。

三匹の虫の鳴き声が、澄み切った青空に吸い込まれていく。
彼らの、気力と共に。

「腹減ったぁーっ！」

ガロンが叫ぶ。目の前には、ささやかながら香ばしい香りが漂う昼食。ちなみに先ほどガロンが倒したモンスターを、エリックが苦労しながらなんとか出した火でスージーがあぶった。ガロンは（本人的には）密かに大好物だったりする。

スージーは溜息をついた。

「まだよ。あと3分」

「細かすぎだろぉーっ！！」

「あのー、スージーさん？」

エリックが弱々しく手を上げる。笑顔が、どこか引きつっている。

「あのー、少しくらい早くても良いかと・・・」

「エリック、すっごく可愛いわ！でも駄目よ。こればかりは、エリックがその目をふるふる潤したって、上目遣いだっただって、私ビジョンで尻尾がふるふる震えてたって駄目。・・・あ、あと2分」

「無理、無理無理！しーぬーっ！I・m hungry！！I・m starving！！」

「ほんつと無駄に発音良いわね！でもその口で未来の勇者なんてほざくのは60億光年早いわよ」

「光年は星の距離であって、それとはちょっと違うのでは・・・」

「？」

エリック突っ込み。だがその声は弱々しい。

スージーはそれでも、頑なに首を振った。

「違おうがナンだろうが駄目。お母さんとの約束でね、ご飯取る時間は規則的じゃないと駄目なのよ」

「お前だって腹減ってるだろおっ？！俺の心の眼は見逃さなかったぜ、お前が『何』ではなくパンの『ナン』と言ったのをっ！！」

「うるさい三下。・・・あと1分」

「三下のナンだよっ？！ヤクザか？！そこまで俺落ちたのか？！あっ、くそぉーっ！俺まで『ナン』って言っちゃまったじゃねえかよおっ！！」

スージーは無言で懐中時計を確認する。エリックはそれを、横からチラリと見た。

かつては全面金色に塗られていただろう表面は、ところどころ剥げ、色あせ、相当の年代物に見える。スージーの代からのものではないことは、一目で分かった。

「エリック、カウントダウン行くわよ！」

突如スージーが意気込む。エリックは背筋をピツと伸ばした。ガロンも意気を奮わせる。

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1・・・はい、良いわよ二人とも！」

「おっしゃー、いただきマッスル！！」

「いただきますですー」

「私が作っただけど・・・ま、いただきまーす！」

ガロンは、まるで貪るように食べている。

エリックは、小さな口で少しずつ味わうように食べている。

二人を観察していたスージーは、偶然エリックと目が合った。

途端、エリックが微笑む。

そして、スージーが言っただけの一言を、さりりとくれた。

「とっても美味しいですー。ありがとうございますですー」

「本当?! 嬉しいわエリック!」

感動のあまり、勢いに任せてエリックに抱きつくスージー。エリックは自分の食料が落ちないように必死で支えつつ、にこにここと笑った。

その先でガロンが一人既に平らげ、いかにも偉そうに鼻で笑った。

「おう、悪くねえな。未来の勇者様の旅先専用出張料理人にでもなるか? いや、もうなってるか。つーわけで、お代わり」

さも当たり前のように皿代わりのニシニシの葉を突き出すガロンに、スージーはぶるぶると震えた。

「そんなに食べたいなら、もっとモンスター倒しなさいよっ! あんたが弱いせいで、ザコかつチビツこいやつしか手に入らなかったんでしょうがっ!」

勇者は、無言で目を逸らした。

三人、出会った？

夜。

人肌のように生温かい風が吹く道端、丁度枕代わりになる大きめの岩に頭を持たせかけ、スージーとガロンは、強制的に閉じようとする目蓋に足掻いていた。

「・・・でもね、エリック。人には規則的な生活というものが・・・」
「僕、魔法使いですからー」

エリックはにこにここと笑う。その笑みに、どこか意思の強さを感じる。

二人の頭部を下に見ながら、エリックは岩の上から穏やかに言った。

「魔法使えば、一晩や二晩くらい寝なくても大丈夫ですー」
「いや・・・こ、こはみりやいの勇者・・・として、俺が・・・」
「ガロンさん、どうかお休みになってくださいー」

エリックは困ったような笑みを浮かべた。

ほうつておいてもそのまま昏倒しそうなガロンにわざわざ返事をするのは、彼の優しいさだろう。どうせ明日の朝になれば、この勇者は自分が言ったことを全て忘れている。

そしてまた、次の日も同じことを繰り返すのだ。

「なんか・・・優しいお話ですねー」
「んあ？」

「いえー、何でもありませんよ?」

首をかしげ、エリックは笑う。彼に背を向ける形で寝転がっているガロンには、見えないと分かっていて。

「ガロンさんは道行く先々で出会うモンスターを“処理”してくれましたしー、スージーさんは美味しいご飯を作ってくれましたしー。だから僕は、何かあった時のために起きてますー」

「エリック・・・」

ふるふると細かに震える腕が、空に伸びた。見ると、まるで末期の一言を言おうとするかのように、スージーが必死で眠気と戦っていた。

なぜかエリックは、自然とその手を両手で包み込んだ。強すぎないよう、優しく、優しく。

「スージーさん?」

「に、じか・・・」

二時間経ったら起こして、と言おうとして、スージーは途中で“事切れた”。三人が出会った、最初の夜のことだった。

彼女の腕をそつと元に戻し、ついでに隣を見ると、ガロンも既に寝息を立てている。そのうちいびきもかきそうだ。

なんだか面白くて、エリックは一人笑い声を零した。

どこまでも純粹で、まっすぐに、疑うことを知らない人たち。

見上げれば、数え切れない星たちがエリックに瞬きかける。

「きれいな空ですねー」

どこまでも黒々と続く闇。その中にきらめく光。

だが真っ黒な帽子とローブが空に溶けると、そこだけ星が無くなったかのようにぽっかりと黒い穴が開いた。

夜の帳は静かに、記念すべき第一日の幕を下ろしたのだった。

三人寄った、エスニアの町？

陽は傾き始めている。オレンジ色の輝きが、三人の頬を感傷的に照らし出す。

「やっと着きましたねー」

エリックがホツと息をつきながら笑った。
歩き詰めで足はガタガタ、お腹も空いている。

「ここがエスニアね」

スージーは半ば引きつった笑顔で『ようこそ、エスニアへ！』と書かれたゲートを見上げた。
歩くことには馴れているが、某自称勇者のヘタレっぷりのせいで非常に空腹なのだ。

声にも力が入らない。

ただ一人、連れ二人に迷惑を掛けまくった張本人だけが、超絶元気にはしゃぎ回っていた。

「おつしやあああつ！着いたぞエスニア！未来の勇者ガロン様のお通りだあぁっ！」

「うるさい、黙りなさい三下」

どんよりとした眼を向けられ、ガロンは仰け反る。

「おいおい、どうしたよ町娘A？元気ないぞ？」

「誰かさんがいつまでたっても弱小モンスターしか手ー出さないか

らでしょうが」

スージーは遠慮なく嫌味を言ってやった。相槌を打つようにお腹の虫が鳴く。

ガロンは、うつ、と言葉に詰まった。

スージーは溜息をつくど、くるりと背を向け、一人歩き出す。

「ま、いいわ。これでもう、おしまいなんだし。一応助けられたのは事実だしね。ありがと、“未来の勇者”ガロン。最後だから言っとくけど、その剣他のに代えたほうが良いわよ。それとエリック、あなたもね。毎晩大変だったでしょ？・・・ありがとう」

どこか寂しい笑顔を魔法使いに向け、スージーは言った。

そしてまた、まっすぐ前を見据える。

赤毛が夕焼けに照り輝き、眩しい。

「ここから先は私情を挟むから、二人を巻き込むわけにはいかないわ」

「そうですねー。僕なんか特に迷惑掛けそうなんで、このあたりでお暇させて頂きますー」

「去る者は拒まない、勇者の鉄則だぜ。名残惜しいけどここまでだ、エリック、町娘スージー」

最後に、誰のものかは分からない笑みを零して。

「・・・じゃあね、二人とも」

三人は、それぞれの道を歩き出した。

三人寄った、エスニアの町？

「こ、今度こそ安いわよね・・・」

空腹と精神的ショックにより、息を切らしながらスージーは、最後の宿屋に向かった。

エスニア中にある宿屋という宿屋を廻り廻って数時間。どの宿屋も馬鹿高い宿賃を請求してくるために、手が出ないのだ。たぶん、今日の前にある宿が、最後の一つ。

「うー。ここが駄目だったら、もう野宿しかないわ・・・」

確かに道々エリックを夜番にして野宿していたが、町とその外とは道理が違う。治安がよく見える町も、しっかりと戸締りをしなければ簡単に盗みが入ることを、スージーは経験上知っていた。

困り果てたスージーは、最後の希望を託し、宿屋のドアを開いた。

らっしやーい、と来るかと思えば、

「駄目だ小僧。一部屋一晚、きっかり銀60枚。びた一文まからんぞ」

「そんなあー。お願いします、僕、銀貨20枚しか持ってきてないんですよー。他の宿屋はみんな高くて、とても僕が泊まれるようなところじゃなかったんですー」

スージーは一瞬、言葉をなくした。

「・・・エリック!」

「はい? あ、スージーさんじゃないですかー」

首を傾げるようにして振り向いたエリックと、ドアに立ち尽くしたスージーは、互いに同じ状況に陥っていることを目だけで理解した。

「・・・スージーさん、失礼ですが、所持金いくらですー？」

「金貨は持ってないわよ。所持銀びったり20枚」

「僕と同じですねー」

二人はがつくりと肩を落とした。

エリックとスージー、それぞれの所持銀を合わせても40枚。一部屋分の宿代にはまだ20枚足りない。

と、スージーが電流に打たれたかのように顔をあげ、宿屋のボスならぬ亭主に顔を輝かせて提案した。

「足りない20枚の分はお手伝い、ってことでどうですか？」

「他に客なんぞいねえんだ。何もすることねえぞ」

「う・・・。あの、じゃあ、亭主さんのご飯を作るとか」

「いらん。結構だ」

「うう・・・」

スージー、再びうな垂れる。エリックも同じようにしよぼくれた。このままでは、本当に冗談抜きで野宿決定かもしれない。

亭主は眉を寄せて、面倒そうにカウンターの向こう側からしっしつ、と手を払った。

「ほれほれ、文無しはあっち行つた」

スージーがすごすごと踵を返し、エリックが一步野宿に向けて踏み出そうとしたその時だった。

「おいしいいいっ！ここなら、銀20枚だろうが何だろうが泊まれるかあっ？！っーか泊めるこのやるおおっ！！」

ああ、とスージーは思わず額に手を当てた。なんだ、このピツタリすぎる登場は。

扉を蹴破るようにして現れた自称“未来の勇者”ことガロンは、宿屋中を見渡すと、おおっと仰け反るようにして大げさなりアクシヨンをしてみせた。

「町娘A！と、エリック！なんでお前らここに居るんだ？」

一瞬、スージーの顔が引きつった。そう何度も町娘町娘と連呼されて、気持ちが良いはずがない。

だが今は、ぶち切れている場所ではなかった。スージーとエリックは互いに目を合わせると、それぞれガロンの腕をがっしりと掴んだ。

このチャンスを、逃してはいけない。

「ねえ。あんた今、銀貨20枚、つつたわね？言つつたわよね？言つてなきゃその口、二度と何も言えないようにするわよ」

「ガロンさん、お願いですー。嘘でも何でも良いんで、所持金20枚持つてますよね？あ、違う、所持銀でしたー。ついでに言つと、やっぱ嘘は困りますんで正直にお願いしますー」

「・・・な、なんだよお前ら。確かに20枚持つてるけど、なんか怖え。なんか怖えーぞ」

ある意味モンスターより怖い。

スージーは元々少し怖いところがあつたからまだしも、あの温和なエリックが、顔にどこか影を宿している気がするのが怖すぎる。

「離せえ！離せよお前らあっ！」

「銀貨60枚、ぴったりですよねー」

「そうよ。離すわけないじゃない。やっと揃ったのよ。ねえ亭主さん、三人合わせて銀貨きっかり60枚よ。良いわよね？」

「姉ちゃん、あんた良い度胸だなあ。野郎二人と缶詰するってか」

亭主は蔑むようにほくそ笑んだ。スージーも負けじと笑い返す。

「五日間も一緒に野宿してきたけど、何も無かったわよ。エリックはずっと見張り番してくれてたし、ガロンに至ってはいびきかいて爆睡してたしね」

「何が爆睡だあっ！毎晩毎晩蹴り入れて来やがって！」

「は？何の話？」

スージーは小ばかにしたような笑いを浮かべる。ガロンは齒軋りし、エリックは苦笑いをした。

彼女の寝相の悪さを、本人だけが知らない。

「まーまー、とにかく三人で一部屋一晚、これで良いですよねー？」

「ふん。好きにしろ」

「やったあー！」

スージーが飛び上がり、ガロンは成り行きを理解しようと首を傾げる。

エリックは目を伏せ、一人笑みを浮かべた。スージーやガロンには消して見せない、自嘲を含めた笑みを。

「・・・また、一緒になっちゃいましたねー」

三人寄った、エスニアの町？

「さて、と。まあとりあえず一晩分の確保は出来たけど・・・困ったわね」

スージーは顎に手を当てて考え込んだ。
エリックとガロンも、眉を寄せて神妙な顔つきをしている。

「明日ここにまた泊まれるお金はないわ。稼いでる時間もないし。町中を廻らなきゃならないんだもの。となると・・・明日中に調べ終えて、すぐ発たなきゃいけないわよね。でも食料ないし、買っためのお金もないし・・・あーっ！もうっ！」

スージーはごろんと床に仰向けになった。

「駄目だわ。計画性が無さ過ぎる。もうちょっと・・・」

もうちょっととお金を持ってくれば良かった、と心底思った。訂正、銀か。

ガロンとエリックも同じような見解になったらしく、三人揃って大の字に横になった。

しばしの沈黙が訪れる。だがそれを破ったのは、エリックだった。

「スージーさんは、エスニアにどういった御用で来たのですかー？」
「私？」

スージーはふっと笑みを浮かべた。

「母さんを、探しに来たの」

「母さんを・・・」

「そう。父さんはずっと前に家出て行っちゃったきり。母さんと私の二人で、ずっと生きてきたの。でもね、それでもどうしてもお金が足りなかったから、母さん、他の町に行っちゃった。稼いでくるねって。しばらくは仕送りも届いたんだけど、でもある日、それがぶつつり途絶えちゃってねー。その頃にはもう、私一人でもなんとかやってけたから良かったんだけど」

「母さんに、問いただすんですかー？どうして連絡しなかったんだって」

「そんなこと聞かないわよ」

心底驚いたように、スージーは起き上がり、エリックを見返した。

「恨んでるんじゃないの。心配だから。働きすぎて、どこかで倒れてるかもしれない。重い病気に掛かって、連絡しようにも出来ないのかもしれない。だから、私から会いに行くって決めたの」

その横顔は、どこか大人びていて。
エリックは思わず目を逸らした。

「そうなんですかー」

「俺はなあっ、未来の勇者となるために、現在進行形で勇者やってる人のところに弟子入りすんだあっ！」

ガロンがいきり立ち、筋肉のついた腕を天井に突き上げた。
その瞳はきらきらと輝いている。

「あんたには誰も聞いてないわよ」

「町娘なんぞには分からねえだろうがなあ、俺は絶対絶対、この世界のどこかにいるっていう伝説の勇者、ソーマ様を見つけて、弟子入りすんだ！」

「誰それ」

いつもならここでガツクリとうな垂れるはずのガロンは、逆に勢いを増し、身を起こすとスーजीに食って掛かった。

「ソーマ様を馬鹿にすんじゃねえぞ。あの人はなあ、悪いドラゴンを倒して、冥土の王様の乱心を静めて、今じゃ何してるか知らねえが・・・と、とにかくく！すっっっげえお方なんだからな！」

「僕、知ってますよー」

エリックが相槌を打った。いつの間にか立ち上がり、小さな窓から夜空を見上げている。

だからその顔は、二人には見えなかった。

「昔、たくさん本を読みましたからー。その中の御伽噺にいましたー。伝説の勇者だって」

「伝説・・・」

「いや、いるんだ！ソーマ様は現実に絶対いる！」

白い目で見えるスーजीに、ガロンは再び言い返す。その頬は、いつのまにか赤くなっていた。

「はいはいっと。ま、玩具みたいな剣使ってる“未来の勇者”さんには、先の長い話よね。で、」

スーजीは、背中を向けているエリックを見た。

「エリックは？どうして旅をしようと思ったの？」

ぴくりと、エリックの肩が震えた。だが返って来た答えは、予想以上に簡潔なものだった。

「好きな人に、会いたいからですー」

「・・・ええっ?!」

「なっお前みたいになちっこい奴が、いつちよ前にこっこっこっ恋っ?！」

「はいー」

ここで初めて、エリックは振り返った。その顔は、いつものように笑っていた。

「大好きな人なんです。この世で一番、誰よりも想ってしまっんですよー」

二人は、身体中の力が抜けたような脱力感に包まれた。

「エリックが恋、ねえ……。アイドルが恋……。駄目よ、アイドルに恋はご法度よ……」

「俺もいつか、べっぴんな姉ちゃんと運命的な大恋愛をして、拳句の果てに姉ちゃん守って戦って死んで……。え、駄目じゃんそれ。勇者じゃねえよ全然」

ツツコミどころの多すぎる二人に微笑みかけながら、エリックは首を傾げた。

「僕達三人とも、誰かに会いたいんですねー」

三人寄った、エスニアの町？

空気が止まった。三人が三人、納得する時間が静かに流れた。

スージーは、行方をくらませた母に。

ガロンは、伝説の勇者ソーマに。

エリックは、愛してやまない人に。

それぞれ、会いたいのだ。

目的は違えど、達成したいことは同じ。会いたい人がいる。

「なんか、すごい偶然ですねー」

エリックがふにやりと笑う。何故だか体の力が抜けて、スージーもガロンも、いつの間にか頬を緩めていた。

「本当ね。三人揃えば、一晩分の宿賃も集まっちゃうし」

「三人寄ればサバイバル生き延びるための知恵、だろ？だから俺達も・・・」

「文殊の知恵、ですねー」

エリックがやんわりと突っ込む。スージーは小馬鹿にしたように笑い、ガロンは顔を真っ赤にした。

「んなつ！エリックはまだしも、町娘に笑われるのは許せねーっ！」「ことわざの一つも知らなくて、今までよくやってけてたわね。私だってちよっとしか学校行ってないけど、その分働いたために自分で覚えたわよ。あ、分かった。そっち方面がてんで駄目だから、暴れ

る系に走ったんだ？」

“フフフ”

「くあーっ！何が可笑しいっ！！」

ガロンは悔しがって地団太を踏む。エリックがそれを宥め、スージーは未だお腹を抱えて爆笑中。

「まあまあ、もう夜も遅いですし、ゆっくりと寝ることにしましょう」

“明日は明日の風が吹くって言うしね”

「三人で町を廻って、すぐに次の町へ出発したら何とかかなりますよー」

いつの間にか、三人行動が基本となっている。だが敢えて突っ込むと、せつかくの雰囲気台無しになるような気がして、スージーもガロンも同意に徹した。

それぞれ布団を敷き、横になる。一番スイッチに近いスージーが灯りを消すと、部屋は突如暗闇に襲われた。

真っ先に眠りに落ちたのは、意外なことにスージーだった。すぐさま彼女の一発目の鉄拳が飛び、うとうとまどろんでいたガロンの顔面に激突する。

「うおおお・・・」

痛みのあまり声も出ず、ガロンは鼻を押さえて呻いた。とりあえ

ず、鼻血の心配はなさそうだ。

「ガロンさん？大丈夫で・・・」

ゴツ、と鈍い音がして、エリックの声が途絶える。ガロンが暗闇の中目を凝らすと、男として最も大切な場所を押さえ、ぴくぴくと痙攣している黒い影が判別できた。同じ男として、ガロンは深く同情した。

「・・・お前こそ、大丈夫か？あ、そうだ。なんか違う話したら気逸れっかもな。教えてくれよ、さっきの言葉の意味。あれもことわざだろ？」

ガロンにしては気を遣った。しかも、勉学に励む精神まで見せた。個人的にはかなり譲歩している方だから、エリックはきちんと丁寧に答えてくれることだろう。

そう、思ったのだが。

「あー、あれですか。あのことわざは、平凡な人たちも三人集まれば、すごい力を発揮できる、という意味ですよー」

「それは知ってる」

ガロンは唸った。

「そうじゃなくて、その・・・えっと、明日の風は明日だ、みたいな・・・なんだっけな？」

「はいー？」

エリックが横になったまま、首を傾げる布ずれの音がした。ガロンは眉をひそめる。

俺は何か、変なことを言っただろうか。

「忘れたのか？お前が言っただろう。そりゃ確かに今の説明じゃ分かりにくかったかも知れねえが・・・」

「僕が言っただのは、『三人寄れば文殊の知恵』だけですよー？」
「え・・・」

ガロンは、血の気がすうっと抜けていくのを感じた。ひんやりとし夜気をひしひしと感じる。

エリックは未だに、ガロンの言葉の意味を解釈しようと頭を捻っている。

となると、さっきのことわざはガロンの空耳だったのだろうか。いや、それはない。一応三人の中では一番旅の経験が豊富で、五感も体力も並以上に鍛えてあるのだ。聞き間違いなど、あるはずがない。

スージーに至っては声も出ないほど笑っていたのだ。
となると、残る可能性は・・・

“明日は明日の風が吹く、ね。世の中何とかなる、って意味よ”

第三者。それも、肉体を持たない――

――幽霊だ。

三人寄った、エスニアの町？

息が、出来なくなるのを感じた。身体もうまく動かない。

骸骨のようにぎごちなく首を回すと、エリックが首をかしげたまま硬直しているのが見えた。魂が抜けてしまったかのようにぼうつとしている。勇気を出して、ガロンは声を出した。

「お、おい・・・エリック」

「ガロンさん・・・」

「い、今のって・・・まさか・・・」

二人同時に、音を立てて唾を飲み込む。次の言葉は、いかにエリックが温和な笑みで嫌味を打ち消せる特技の持ち主だろうと、ガロンがどんなにがさつで人の心も空気も読めない馬鹿だろうと、口に出すことは出来なかった。

代わりに、くすくすと笑う声が聞こえた。

“遅かったわね。いつ気づくかしらって待ってたんだけど”

ひいっとガロンは声にならない悲鳴をあげ、エリックは再び固まった。

幽霊らしき声は重ねて言う。

“あなた達に、お願いしたいことがあるのよ”

「てつてて天国なんて、まだ行かねえぞこの野郎！」

「いや、女性の声ですけどね、ガロンさん。野郎じゃありませんよ！・・・。じゃなくて、僕、あの、ちょっと外の空気がとってもとっても吸いたくなってきちゃいましたぁーっ！」

泥棒も顔負けの素早さでエリックは飛び跳ね、部屋のドアを開けて廊下を飛び出す。ガロンも顧みず閉まろうとするドアを力でこじ開けて、ガロンも廊下へ躍り出た。

部屋とは異なり、薄暗いが一応の灯りが灯っている廊下に出ると、二人はやつと人心地がついて、ほっと息をついた。

「ったく、お前勝手に閉めるなよな。俺がいるだろこの勇者様が」
「すいませんー。勇者様なら幽霊も大丈夫かと思ひましてー」
「・・・・・・・・」

それは確かにそうだ、とガロンは一人納得した。でも。

「俺はまだ新米なんだ。半人前なんだよ勇者の！だから逃げたい時もあるんだ！」

なんとも論理性のない主張をし、ガロンは無理やり納得した。
エリックは弱々しく笑いながら、廊下を見渡した。

「どうした？」

「あの・・・そういえば、スージーさんは？」

しまった、と気づいてからでは遅かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2902j/>

三人寄った

2010年10月11日00時13分発行